

月報 52号	発 行 所 青丘文庫 編集・発行★韓 哲 曦 〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1 メゾンド青丘ビル2階 TEL(078)734-5989 FAX 735-0660
------------------------	--

一月書翰以後の東満の運動〔1933-35〕

朝鮮民族運動史研究会 第90回例会

金森 襄作

1933年の〔1月書翰〕は、赤色地区形式方式ではなく、統一戦線結成による運動の転換を求めているが、前年コミンテルンで決定され、中共本部が主催した北方会議内容と異なるなど不徹底さを残した。李輝彦がこの決定を携え、かつ崩壊した満州省委再建の任を果すべく来〔満〕し、努力を重ねた。しかし、日帝の弾圧は厳しく、10月に検挙され、残存幹部や中共本部特派員達によって再度活動は行なわれたものの、34年後半期にまた大検挙が続くなど、省委としての機能は発揮しえないまま経過していった。

孤立的状況下で東満特委は、日帝の侵略戦争開始に対応して、前年同様の異動方式の闘争を再開した。しかし、軍事作戦の完了、〔満州国成立〕治安対策としての〔討伐〕開始によって、次第に追詰められ、33年末からは、山間地域に〔ソビエット〕地区を形成していった。しかし、中共本部の強力な支援を期待できない現状にあって、省委を中共から分離、独立させるべきだという〔独立論〕が台頭し、一時治り、翌34年6月頃にも再度起ったが、これは大きな努力にはならなかったようだ。

引き続く日帝弾圧によって赤色地区も大打撃を受けるようになると、夏期から帰順者が続出し始める最悪の事態に直面した。すると、極左的闘争は犠牲のみ増大させると、武力派に対する政治派〔中央派〕勢力が台頭し、両者の間に相当激烈な対立が展開された模様である。政治派は政治派を日帝の走しとみなし、帰順希望者も合せ100名を越す活動者を殺害するなど大々的に粛清を行なった。しかし、秋、赤色地区が壊滅的打撃を受けるや、ついに省委は東満特委を李立三残存主義集団だとみなし、工作員を派遣して続々に幹部を粛清し、〔民生団事件〕へと発展する。それは400名前後の大殺害、30%の黨員更送という悲劇でもあった。この後35年から6年にかけてようやくコミンテルン指導体制が確立し、一月書翰のいう方向転換が図られていくが、今後これは整理していきたい。

在日朝鮮人運動史研究会第117回例会（1990年1月14日）

「在日韓国朝鮮人父母の民族教育意識の変化——10年前と比較して——」

中島 智子

1979年に豊中・尼崎・大阪三市において、日本の公立学校に子供を通わす父母の調査をおこなったが（「在日朝鮮人史研究7号」参照）、それから10年目にあたる1989年に再度同じ地域において同種の調査をおこなった。回収数1063（豊中169, 尼崎211, 大阪661, 宝塚22）、回収率64.9%。ただし、対象学校は前回と全く同じではなく、調査用紙も同一ではない。また、今回は大阪生野区の父母が全体の6割を占めて、ややサンプルに偏りがある。いくつか要点を記すと次のようである。

(1) 一般に年月と共に在日の意識は風化もしくは同化が進むと考えられているが、前回と今回の調査結果を比較した限りではそうでもなく、質問項目によっては逆の傾向のみられるものもあった。たとえば、日本の公立学校で祖国や在日のことについて教えるべきかどうかでは、「教える必要がない」が前回15.5%、今回9.2%、こどもが民族のことはや文化、歴史を学ぶことについての否定的回答が、前回6.9%、今回1.8%で、祖国や民族の話題が出る家庭が増えている。

(2) このように否定的回答は少なく、全体が積極派（「教えるべき」「必要だ」など）とあいまい派（あるいは無関心派、「わからない」「本人しだい」など）に分岐している。これには父母の属性（世代、学歴、学校の種類、家庭の会話状況、交際関係など）との相関がみられるものもある。

(3) 日本の学校に通わす理由は、前回とほとんど変わらなかった。教育に関してはこの10年間で何ら状況の変化がなく、とくに民族学校をめぐる状況の変化がないことを表わしている。民族学校処遇の改善については、8割の父母が賛成している。

(4) 将来については今回設問を変えた結果、①韓国・朝鮮籍のままで民族意識を失わずに生きてほしい。39.8% ②韓国・朝鮮籍のままでいてほしいが、民族意識は薄れてもしかたがないと思う。14.0% ③日本国籍に帰化しても、韓国・朝鮮人としての意識を失わずに生きてほしい。24.1% ④日本国籍に帰化して、日本人として生きてほしい。5.7% であった。民族意識にかかわらず国籍の保持を望むのが（①+②）53.8%、国籍にかかわらず民族意識の保持を望むのが（①+③）63.9%で、相対的に民族意識の保持の方がより望まれているといえる（もちろん両方の保持を望む層が多いが）。

ここでは具体的な結果を一つ一つ提示できないが、今回の調査報告書を「在日韓国・朝鮮人の民族教育意識」と題して近く明石書店から出す予定なので、御参照願えれば幸いである。自由記入欄への記入も資料としてすべて載せている。

第4回「日韓・在日キリスト教関係史研究会」例会 90/1/27

「日本帝国主義下の朝鮮伝道」(日本基督教団出版局)を読む

(飯沼二郎、韓哲暉 著)

発表: 梁/望月

第1章、乗松雅休の朝鮮伝道

朝鮮人伝道を大々的に始めるのは組合教会で、1911年からのことであった。その伝道は、日本語による礼拝であり、日本国民への教化であった。ところがこれより15年前の1896年に、すでに朝鮮人に朝鮮語で伝道した人がいた。乗松雅休であった。彼は、朝鮮人と衣食住を共にし、同じ言葉で語る中で、権力や組織からの援助の全くないどん底の貧しさにより、過酷な収奪に苦しむ朝鮮人とひとつになった。また、彼の死後もまるで原始キリスト教時代のイエスのように、のちのちまで語り継がれていた。

こうした乗松ではあったが、三一独立運動については否定的であり、「独立万歳など叫び、不謹慎の輕挙妄動をなす群もありて」と日記に書くほどであった。とくに、自らが20年近くいた水原での堤岩里虐殺事件については何の言及もない。研究会においては、この乗松自身のキリスト教が問われることとなった。これは、当時の日本人の限界でもあった。しかし、彼はアイデンティティーとしては日本人でも、朝鮮人と死をともにする覚悟があったと、指摘がなされた。

第3章、織田梢次と西田昌一の朝鮮伝道

織田も、なんらの教派的支援もなく、1928年に朝鮮へ渡った伝道者であった。彼は朝鮮で長年伝道をしている先輩に、朝鮮伝道の厳しさを知らされ衝撃を受ける。そこで朝鮮人になりきることを決意するのであった。また、のちに半生を聖書販売にささげた西田昌一も、朝鮮伝道を独自に始めていた。織田は、敗戦後には、田永福と朝鮮名を名のり在日大韓教会の牧師となっている。この点についても、はたして朝鮮人になってしまうことができるのか?との問いがなされた。

日本のキリスト教が、国家に協力して朝鮮人伝道をすすめていた時期に、個人の決断でもって朝鮮に渡った3人の伝道者の生き様を学ぶことができた。また、現代の私達が彼らの信仰の質を批判することはできるだろう。しかし、同じ問いの前に私達も立たされているのだ。 文責: 望月

<新図書案内>

朝鮮民族運動史〔未定稿〕	1-6	外務省警察史 支那元部	ソウル	高麗書林
現代評論 1巻-4巻〔1928-1929〕		韓国学振興院	ソウル	同所
朝鮮総督府月報	1-8〔1911-1915〕	高麗書林	ソウル	同所
学 林 第10号		延世大学校史学研究会	ソウル	同所
東洋史研究文献類目	1951-1962	京都大学人文科学研究所		
東洋学文献類目	1963-1987	京都大学人文科学研究所		
ハル 第1、2巻	1919-1920		ソウル	現代社
湖南評論 第1-6巻	1935-1937		ソウル	現代社
新階段	1-3		ソウル	現代社
東方學志	62号	延世大学校史学研究会	ソウル	同所
民族文化論	第6-9号	嶺南大学校 民族文化研究所	ソウル	同所
新韓国風土記	第1-3巻	根の深い木	東京	読売新聞社
釜山史学	第13号	釜山大学史学会	釜 山	同所
朝鮮学報	第132号	朝鮮学会	奈良	同所

研究会御案内

〔在日朝鮮人運動史研究会 第120回例会〕

日 時 1990年3月11日〔日〕午後2時

◎八尾を中心とした阪神教育闘争について 岡本 喜代美氏

◎解放直後の在日朝鮮人文化運動史 山根 俊郎氏

〔朝鮮民族運動史研究会 第91回例会〕

日 時 1990年3月18日〔日〕午後2時

テーマ 申 采浩 の〔無政府主義東方連盟事件〕について

報告者 館山 英夫氏

〔日韓、在日キリスト教関係史研究会 第5回例会〕

日 時 1990年3月24日〔土〕午後2時

テーマ 日本朝鮮支配と宗教政策の第2章日本キリスト教の朝鮮布教

報告者 李 省展氏

一場所はいずれも青丘文庫にて